

# How to...

## 「学部主導」国際経営の生きた教材マレーシアへの留学を 学部一丸で推進、語学力と国際感覚を養成

### 神奈川大学

経営学部が独自に開発したマレーシアへの長期留学プログラム。4年目にして枠が不足するほど人気のプログラムだ。背景には、留学の重要性を熟知した学部教員の奮闘がある。

#### 異文化に飛び込ませ 価値観の転換を促す

日本の大学では珍しい、マレーシアへの長期留学プログラムBSA P (Business Study Abroad Programme) を経営学部で開発。2013年度から実施しています。派遣人数は年間約50人。春と秋に募集し、早ければ1年後期より、提携大学2校3キャンパスのうちいずれかで1年間、英語で教養や経営学を学びます。派遣先の修得単位を神奈川大学の卒業要件単位40単位に充当できるため、4年間で卒業できます。

なぜ、マレーシアなのか。理由の一つは、多民族国家であり、各民族が母語を持ちながら、英語を共通言語として使用していることです。老若男女がなまりのある英

語を駆使する姿を見れば、言語を道具として使うことの意味を理解できるでしょう。加えてマレーシアは高度経済成長のまったただ中。多数の日系企業の進出先であり、国際経営を学ぶうえで絶好の生きた教材だと言えます。物価や治安のよさも留学に適しています。

しかし発展中の国であるが故に、配慮の行き届いた先進国への留学に比べると、はるかに多くのカルチャーショックやトラブルが学生を襲います。手続きの手違い、レギュレーションの変更、現地の人々や他国の留学生との文化摩擦、なじみのない宗教の習慣。寮には虫やヤモリが毎日顔を出す。もちろん留学保険には加入しており、万が一の際は日本語ができる現地スタッフがサポートします。が、基本的には個人の力で切り抜



准教授・学科主任 **行本 勢基**

ゆきもとせいき●1997年亜細亜大学国際関係学部卒業。1999年筑波大学大学院修士課程地域研究科修了。2004年名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了。財団法人とつり政策総合研究センター研究員、早稲田大学商学術院助手、高松大学経営学部専任講師を経て、2012年より現職。

けてもらっています。我々現場の教員の企画にゴーサインを出した経営学部の後藤伸学部長は、BSA Pを「基本的な泳ぎ方を教え、池に飛び込ませて自由に泳がせるプログラム」と表現しています。

この趣旨を理解し、現地で主体的に行動すると、学生の価値観は1年後にガラリと変わります。「日本や欧米だけが世界ではない」という視野の広さ、少々の困難には動じないたくましさ、率先して挑戦する積極性などが、その後の学習や就職活動に好影響を与えることは言うまでもありません。

#### 希望者制にもかかわらず 3分の1が海外へ

本学部は国際経営学科のみの1

学科制です。国際感覚の育成の場として海外体験を重視しており、BSA P以外にも渡航の方法が複数あります。入門編の短期留学プログラムがSA (Study Abroad) です。学んだ外国語を現地で試すことが目的です。

一方、BSA P修了者がさらなる海外体験を積み重ねていく。ハイレベルなプログラムが、全学を対象とする半年〜1年間の派遣交換留学制度です。外国語学部をはじめとする他学部生との競争に勝ち抜けば、BSA Pと合わせて1年半〜2年間で海外で過ごしたうえに、4年間で卒業できます。この秋に3人の派遣者が決まりました。海外インターンシップやゼミ合宿でも海外に赴く学生もおり、学部生約2100人のおよそ3分の1が、在学中に海外体験をしている計算になります。

このように多くの学生が留学に挑戦するムードを作るには、留学説明会などを開くだけでは不十分です。本学部で海外に飛び立つ意欲を強く後押ししているのは、語学の授業を担当する教員ではないでしょうか。

経営学部の語学教育は第二外国語を必修とせず、1言語を集中的に履修してもよい形式で、全て専任教員が担当します。教えている

本人たちに留学や海外研究の経験があるため、海外体験の重要性を理解しています。全語学担当教員がプログラムの意図を熟知し、1年次の週4回の授業の中で、学生に留学を勧めてくれるのです。

#### 方針を高校と共有し 接続を強めたい

BSA Pは4年目を迎え、これへの参加を目的に本学部を志望する高校生も現れ始めました。本学が第1志望ではなかった学生も、郊外で、周囲は自然ばかりのキャンパスに通ううちに、「この大学にきた意義を見出さなければ」と逆に奮起するのでしょうか。小さなキャンパスのため、教職員の連携がしやすく、一人ひとりの面倒が見やすいという利点もあります。

留学希望者の増加は喜ばしいことである反面、枠の不足という問題にもつながります。BSA Pは選抜制ですが、2016年度後期は倍率が2倍になりました。マレーシアの他大学や他国の派遣先開拓が急務となっています。

派遣前の語学力の向上も課題です。現状は学生の語学力が二極化しており、現地での体験にどうしても差が出ます。中には、マレーシアならではの経験を積めないまま

ま帰ってきてしまう学生もいます。対策の一つとして、派遣が決まった学生には約1か月前から週1回の英語のトレーニングを課すとともに、有益な留学にするための心構えをワークショップ等で学ばせています。これらにより日頃の学習へのモチベーションを高め、派遣者の語学力を原則、参加条件としているTOEFL (ITP) 450点以上にするのが当面の目標です。

高校への周知の強化も検討しています。過去にBSA Pで大きく力を伸ばした学生の出身校を見ると、いくつかの高校名がよく挙がることに気づきました。本学の教育方針と何らかの共通項があると想像できます。高校に対して「成長した先輩の姿」である在学生をロールモデルとして提示し、留学をはじめとする教育内容への理解を得られれば、理想的な高大接続の形を築けると考えています。

#### 成果

- ▶タフな学生の増加
- ▶留学希望者の増加

#### 課題

- ▶BSAP派遣先や、派遣人数の拡大
- ▶派遣前語学力の向上
- ▶高校生への周知



神奈川大学

▶1928年、前身となる横浜学院創設 ▶7学部20学科2プログラム。学生数18929人  
▶湘南ひらつかキャンパスには経営学部、理学部を置く。経営学部の学生数は約2100人

### 神奈川大学経営学部の4年間のグローバル人材教育計画

※履修の一例。必ずしも配当年次を表すものではありません。

入試	1年	2年	3年	4年	めざす人材像	
・公募制推薦入試、グローバル人材育成部門をはじめとする各種入試制度 (英語外部検定試験の基準スコアあり)	意識づけ	全体オリエンテーション時に留学制度を紹介。語学授業で留学を推奨	ゼミ(必修)参加時に先輩や教員の話を聞いて刺激を受ける 交換留学生との交流		・アジアの一員という認識の下、他者から学ぶ姿勢を持つ ・予測できない困難にも臨機応変に対応できる ・さまざまな国・人種と豊かな交流・仕事ができる	
	語学	必修科目は1か国語のみ(第二外国語無し) 英語力集中アップ講座	TOEFL集中対策講座 イングリッシュラウンジ			
	留学	留学のすすめ(自由参加の説明会) BSAP事前研修	BSAP(1年間)またはSAプログラム(1か月間)	ゼミ合宿(数日間。一部のゼミのみ) / 海外インターンシップ(1か月間)		派遣交換留学(半年〜1年間)
	専門	英語で学ぶ経営学 (経営学を英語で学ぶ3科目、日本の文化・社会・企業を英語で学ぶ3科目から適宜履修)				